

「第三の経済学」の生誕：石川興二の人と思想

鈴木，一典

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

219

(終了ページ / End Page)

230

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020688>

「第三の経済学」の生誕－石川興二の人と思想

福祉社会専攻

修士課程1年 鈴木 一 典

はじめに

筆者が石川興二（1892－1967）に関心をもったのは、石川が『西田幾多郎全集』の月報によせた「西田哲学と経済学」に接したのが最初であった。その後石川の主著である『第三の経済学』⁽¹⁾を一読して、“第三の経済学”という呼称が決して底の浅い思つきや誇張ではないことを感じた。荒削りだが氏の問題意識には共感する所が多くあった。

筆者はマルクス経済学に失望し、新しい経済思想の可能性を手探りで求めていたが、戦前、戦後を通してこのような試みがあったことに驚きを禁じえなかった。石川の経済思想の独創的な試みを現代に継いでいくことの必要性を痛感したのである。

石川は近代日本の代表的な哲学者である西田幾多郎に哲学を師事し、経済学を河上肇に学んだ。西欧哲学の紹介や輸入をもって始まった哲学研究が、西田の哲学をもって初めて独自の体系を持ったのである。河上もまた日本におけるマルクス経済学研究の先駆者であり、『資本論』研究者として、輝かしい役割を演じた。その一方で「宗教的真理」と「科学的真理」との総合を目指した異色の経済学者であった。石川は西田哲学を経済学の根底にすえることをライフワークとし、河上の後を継いで京都大学で経済学史、経済哲学を講じた碩学である。

経済学は科学である、しかし科学としての経済学も、その根底には独自の哲学思想を有している。その思想の深みはその経済学の性格を根底的に制約するのであって、経済思想はその哲学を超えることはできない。西田幾多郎その人もまた、石川の試みを肯う発言を残している。

「併し私は経済の背後には哲学があると思ふ。例へばアダム・スミスは哲学者であり、その経済学は彼の大きな体系の一部であった。マルクス経済学に哲学的な背景があることはいふまでもない。そこで日本の経済学はやはり日本の哲学を背景にせねばならぬと思ふ。」と⁽²⁾。

第三の道 (the third way) という、イギリス労働党のトニー・ブレア首相のブレーンである社会学者のアンソニー・ギデンズが、アメリカ資本主義とも、社会主義とも異なった社会民主主義を「第三の道」と提唱したことから注目されるようになった。しかし第三の道の歴史は古く、1930年代にF・オッペンハイマーが第三の道 (der dritte Weg) を主張したのが最初であるといわれる⁽³⁾。その後も多様なバリエーションを伴いつつ、繰り返して第三の道が語られてきた歴史がある。

ではなぜ、これほどまでに「第三」の呼称に執着するのだろうか。例えばフランス語圏において、シェイエスは、「第三階級とは何か」と問うて、「すべてである」と高らかに語っている⁽⁴⁾。「第三」なる概念を、第一と第二に並立する第三としてではなく、第一と第二を止揚する、新たな価値を持った、あるいは新たな潜勢力を持ったものとして第三の道を主張するという意図がそこには感じられる。

筆者は現代において第三の道を提起する思想家らが、決まって諸外国の思想の紹介で満足していることを訝しく思っていた。ところが諸外国では過去の博物館に入れられていたなどと揶揄されることのあったドイツ歴史学派が再び脚光をあび、シュモラー・ルネサンス (Schmoller-Renaissance) ゾンバルト・ルネサンス (Sombart-Renaissance) を迎えている。それに比べ、わが国の第三の道派については基礎的な研究もされないままである⁽⁵⁾。

近年エコロジー運動の中でも世界を獲得せんとする積極的な概念として第三の道が語られるようになった。戦前、戦争協力への道に向かってしまった第三の途論の陥穽を超えるためにも、石川の「第三の経済学」を検証する意味があると思うのである⁽⁶⁾。

若き日の石川興二

今日石川の著書もほとんど手に入らないだろうし、石川を知る手掛かりとなる文献すら極めて限られている。また石川興二の人となりについて語ることでできる人も限定されていることから、石川興二の経済思想とともに略歴をここに記すこともあながち無意味ではないと思うので、石川の経済思想を紹介するに先立って、簡約に生涯をスケッチしておきたい。

石川は明治25年5月16日に横浜に生まれる。父親が内務省の官吏の職にあったことから各地を転々とした。父親の郷里は石川県と福井県の県境である大聖寺である。父親も学問に理解のある優秀な人で、金沢の法律専門学校を卒業した。当時の群は今と違い一つの行政区であったが、後に父親は岡山県で群長にまでなった、いうなれば名士であった。

このような家庭環境から石川は役人らしく官僚的色彩の濃い家庭に生まれたことになる、そんなことも反映してか儒教的な思想のもとに明治人らしい気骨のある政治的人間として、あくまで国家に尽瘁するという姿勢で貫かれた生活信条を若くして獲得することになった。この家庭的環境は彼の経済思想を深い所で規定していると筆者は考えているが、石川の思想や人なりを理解する上で記憶しておくべきだろう。

家庭の伝統的な宗派は浄土宗であったが、六校の頃池山栄吉師を介して『歎異抄』と出会い一時浄土真宗に触れ、心を奪われる、おそらくは早くして逝った母親に対する思いから宗教的なものに触れたのだろうと想像される。それ以後は特に親鸞や法然、浄土系をはじめ仏教の影響は考えられない、やはり思想的骨格は「修身、斉度、治国、平天下」という儒教の考えによって貫かれていた。

岡山中学では数学や物理が好きであったようだが、三年時に英語のテキストでホップハウスの『リベラリズム』を読んだのを機に、経済的平等性が自由の前提であるということを知り経済学の必要性を感じたという。大学に進むにあたって父親が官吏の職にあったことから東大に願書を出して試験を受けることにした、そして合格したにもかかわらず、東大の教授が老齢であって、これらの先生に学んだ新進気鋭の学者は京都に集まっていると知り、せっかく合格した東大政治経済科を辞退し、当時無試験であった京都帝国大学法科大学に進む、大正三年のことである。石川は後年当時の多くの青年の畏敬の対象であった西田を慕ってわざわざ京都を選んだことを自慢の種にし、周囲の人によく話していたというが、彼が京都を選んだことの中にも、常に名利を求めず真理探究こそを第一義のこととした姿勢がうかがわれる。

六高の岡野教頭から当時京大の学生監を務めていた西田とは竹馬の友である山本良吉を紹介され、山本からは特に優れた先生として哲学の西田幾多郎と、経済学の戸田海市に学ぶことを勧められる。ほどなく両先生を尋ねたようであるが、人には人生を左右するような大きな出会いというものがあるが、石川にとってこの両巨人との出会いはまさに邂逅と呼ぶにふさわしいものであった。石川は大学に進んだ当時を回顧して次のように述べている。

「大正三年に六高を卒業し、経済学の根本的な研究を志して京都帝国大学法科大学政治経済科に入学した私が、最初にお訪ねした先生は、西田幾多郎先生であった。お宅は清風荘の北側を流れていた小川にそって南向きの長い家であった。哲学は何如に学ぶべきかをお訪ねして、学問研究の態度について懇切に教えて下さった。」⁽⁷⁾

西田哲学への傾倒ぶりは大学入学当時から、生涯に亘って変わることはなく、『思想』に西田の論文が掲載されるのを心待ちにし、発表されるとすぐさま背筋を伸ばして鉛筆を片手に真剣そのものに「身読の行」を実践していたという。

ところがせっかく入った京大の経済学関係の講義は、彼を満足させるものではなかった。当時経済原論の講義は田島錦治が講じていたが輸入学問の域を脱せず、外国の経済思想の紹介に終始するだけの講義にもたたりなさを感じたのである。特に経済学とはそもそも何であるのかという根本問題には何ら触れられることのない講義に満足を感じることが出来なかった。いわゆる「陰気な学問」たる経済学には青年の頃より意に満たない何物かがあったのだろう。

一時は経済学部から文学部に転部しようかとも悩むが、留学中であった河上の講義が後期からはじまることを知り、転部を思いとどまった。帰朝した河上の講義には全人格的な満足を感じた。河上はその頃カーライルやラスキンらの人道主義的経済学をマルクス経済学と同様に高く評価していた時期でもあり、石川は河上の熱情的な

講義に陶醉しきり、河上の講義が終わるとそのノートを大事に抱くようにして吉田山に登っては頂上付近にあるベンチに腰をかけては何遍も何遍も講義ノートを読み返していたという。特に河上の『祖国を顧みて』にはいたく感動していた。

当時の政治経済学の学生は20~30名であったことから、先生と学生との間は今日のような疎遠なものではなく、親密なものがあったようで、特に石川は熱心で、しかも一途なところから、櫛田民蔵らとともに河上とは特に親交を深めた。当時の河上と石川との関係について、佐々木惣一氏は次のように紹介している。

「或る日河上君が来訪した。何の用であったか忘れたが、何か雑談していた。或る青年が又訪うて来た。とにかく通ってもらった。ところが驚いた。その青年は私をたずねて来たのではない。河上君をたずねて来たのである。その青年は、河上君の家を訪うたら、同君が私の家に来ておると聞いて、私の家に来たという。私に逢いに来たのではない。私の処におるといふ河上君に逢いに来たのである。そして、その携えているノートを出して、河上君に学問上の質問をした。河上君も答えざるを得ないので、答えた。私は河上君とその青年との問答を、側で楽しんで聞いていた。私は、教師たる河上君が弟子たる者にかくまで影響を與えているかと、感心した。同時にかくまで熱心に河上君の説を研究する熱意を持っている青年にも関心した。その青年とは誰か。後大学を卒業して研究を続け、一時地方の或る学校に教授となり、次で京都大学に教官として帰ってきた経済学博士石川興二氏その人である。かくまで親密に教を授けまた教を受ける、という関係をつくり得たのは、矢張河上君の学者としての影響力によるのである。」⁽⁸⁾

石川は「この人は」と一度心に決めると徹底的に研究するところがあり、反面気にいらないとすると、すべてを否定するような、一面的なところがあった。

河上は櫛田に宛てて、次のように書き送っている。「親分子分観、うれしく拝読しました。仰の通り私は子分といふものを有たぬ。私の有つているのは知己である、友人である、同志である、真理と正義の前に頭を並べて拝跪せんと志せる一味の道人である。しかし其数は至つて少ない。只今京都には一人居る、その一人が今年の七月には大学を卒業する筈である。今一人は東京に居る。それは君である。其外に殆ど知己は無い、しかし私は其で沢山だ。」⁽⁹⁾

河上によって「京都に一人居る」と言われた人、それが石川である。石川が卒業式を終え河上の私邸を訪ねると、河上が石川の卒業を祝うためにあらかじめロンドンに注文しておいた『ミル自伝』の第一版の扉に「学に志す者へ」として次のように書き添え贈っている。

「是の書は余が予て君の卒業を祝せんとて倫敦に注文し置きしもの也 今卒業式正に終り君乃新たに誓を立てて大学院に入らんとするに臨み茲に所懐の一端を巻首に録して之を君に贈る 凡そ学に志す者は才の乏きを悲む勿れ努むることの足らざるを恐れよ所謂人一たびすれば己之を百たびとすとはこれ也 昔はミル死の床に横わり最後の一句を吐いて白うもの即ち是也 昔はヘーゲル死の床に横わりて言えらく Nur einer hat mich verstanden! 斯く言いつつ彼は忌しげに之に付け加えて言う Und der hat mich auch nicht verstanden! 古来哲人は皆此の如し 今や世界の人類其数何十億我同胞凡そ六千万中に恒産を得ず恒心を得ざる者甚だ多し 君希くば所志を一貫して天の負托に反く勿れ」というものである⁽¹⁰⁾。

その後河上の指導の下に特選給費生として大学院に進むが、大学院に進むにあたって石川は戸田海市を訪ねた。戸田は石川に、大学院に入るくらいなら一年間は哲学をみっちり勉強した方が良くと教示される。石川はその通り大学院で経済学の哲学的基礎を求めて研究の中心を哲学において、西田の講義や、波多野の哲学史など、もっぱら文学部の講義を聴講した。その頃から次第に河上との間の親密な師弟関係に溝が生まれつつあった。

経済学は西田哲学をこそ指導原理とすべきだと考えはじめていた石川にとって、河上の経済学は哲学的基礎が脆弱ではないかとの思いを断ち切ることができなくなった。石川は当時の河上について「先生は哲学の研究は経済学の研究ではない、というようなこともいわれました。それで非常に憤慨して、そこからじゃなくては経済学の研究はできないじゃないかという事を先生に対していわざるを得ないようになりました。」と述べている。⁽¹¹⁾ ここからも察せられるように、当初から哲学的な関心の深い経済学徒であった。そんな内面的な苦闘を経ながらも、常に経済学と哲学という二足の草鞋を履いて研究を続けた。哲学的研究への渴望止みがたく、経済学部の講師の職を辞して哲学科に編入せんとまで考えたようであるが、石川の生活面をも配慮し、思い止まらせたのは西田その人であった。西田は若くして親類の家に寄食するというような経験もあり、労苦を重ねたことから、弟子

たちの生活面にも心を砕いた。

石川が最初に書いた論文は、後に『経済論叢』に発表された「経済学不進歩の原因について」である。内容的には当時の指導教官であった河上肇の経済学説に対し、哲学的必要性を主張し、河上の経済学説を批判したものであったが、戸田の配慮で河上の著書からの引用を一切割愛し、大幅に修正を施した上で掲載されたといういきさつがある。思想家は自己の処女作に向かって自己の思想を完成させるとはよく言われるが、石川もその例外ではなく、この論文は石川の生涯を占うような論文であった。

河上に対して哲学的必要性を主張したのは、周知のように櫛田民蔵の批判を以て嚆矢となす。即ち有名な「資本主義は闇に面するか光に面するか」である、次に福本和夫がその後が続く。中でも福本の「大正14年京都大学で行なわれた『社会の構成＝並に変革の過程』なる講演を契機に、大学内での河上の『人気』は失墜し、学生の一部のものは公然と河上に決別の宣言をする者まで現れた。しかし注意しておきたいのは石川がこの論文を『経済論叢』に発表したのは、大正9年のことであるから、石川の批判がこのような単に時流に乗った底の浅いものではなかったことは明記されるべきだと思われるし、また『哲学』といわれるその内実が石川の場合、後で詳しく述べるが彼らの批判とは質的に異なっていた。一口でいうと石川が師河上に対し一歩も譲らなかった哲学とは西田哲学に他ならなかった。

石川が留学から帰国するのを河上と義弟にあたる末川博氏が京都駅に出迎えた。そして河上は数日するとわざわざ袴姿で石川のもとを訪れ、「石川君、君は経済学の研究には哲学が大事だといっておったわけだが、私も君のいない間に、マルクスの研究を進めることによって、その事が解った」と語ったという⁽¹²⁾。

石川は後々まで自慢気に話していたというのが、その哲学的な内容たるや石川のそれと河上のものではもはや埋めがたい隙が出来ており、実は両者の離叛を決定的にしたのである。

かくして石川興二は「宗教的真理」と「科学的真理」との総合を目指した異色の経済学者である、経済学における河上肇、それに青年時代から畏敬の対象であった哲学における西田幾多郎という二人の師に師事することになり、哲学と経済学との二足の草鞋を履いて、最良の場において石川独自の『第三の経済学』を準備することになる。

その他に学生時代の石川に影響を与えた人物に、戸田海市がいる。河上を京大に招いたのも戸田であり、石川が大学に学ぶ時に懇切に手解きをしたのも、また大学院に学ぶ時に適切な助言を送ったのも戸田である。戸田は当時の経済学科のパイオニア的存在であり、石川がミルを知ったのも、河上と対決姿勢を強めるにしたがって評価することとなるマーシャルもいずれも戸田海市を経由して学んだのだった⁽¹³⁾。

留学時代に決定的な影響を受けたのがデイルタイと、マーシャルである。マーシャルにひかれたのは単に師である河上が労働価値説の立場を取りはじめたのに対抗したこと、マルクス経済学に対する対抗意識も働いたことは否定できない、だがマーシャルはヘーゲルやシェリングなどドイツ古典哲学にも造詣が深く、イギリスの経済学者だけあってラスキンにも影響を受けており、経済学は抽象的な経済人ではなく、血と肉がかよった人間を扱うものだと考え、経済学の性質は物理学よりも生物学に近いとも理解していた。哲学的な関心が深い、近代経済学者の中にあって稀有な存在であった、そんなところに石川がマーシャルにひかれた一因があったのではなかろうか。またミルについてもそうなのである、石川は「ミルの、経済学者以外何ものでもない経済学者は良い経済学者でない、という語は、その後永らく私の研究に影響を与えた」と述べている⁽¹⁴⁾。

石川は、晩年は書齋にアルフレッド・マーシャルと西田幾多郎、それに河上肇の写真を高く掲げていたというが、主著である『第三の経済学』を書き上げて後に、生涯の師に対して『恩師・西田幾多郎・河上肇』なる著作を意図していたというが、晩年は寝たきりの生活が続き、残念ながら歴史の女神は石川にかかる書を書きあげるだけの時間的余裕を与えなかった。

石川の青年時代は西田、河上に思慕し、経済学の研究を開始するが、輸入学問としての経済思想に飽きたらず、新しい哲学的立場に立脚した経済思想を形成せんとする志に燃え、その基礎となる哲学的立場を獲得しようと努力した暗中摸索の時、大抵の青年がそうであるように彷徨の時であった。

石川興二の人柄など

石川は河上が昭和3年に京都大学を去ったのち師の講義を受け継いだいわば直系の弟子であり、且つ西田幾多

郎の直弟子でもあった。石川が自負するように西田に師事した唯一の経済学徒であることに間違いはない、だから河上や西田の業績を顕彰することを目的とした河上会や寸心会でも西田や河上と石川との熱い関係について積極的に研究されてもよさそうなものであるが、実際はほとんど顧みられてはいない。

このように軽んじられるのにはいくつかの理由がある、もちろん一つには当時であっても、石川の経済思想は、既成のマルクス経済学や近代経済学という教科書的な枠組みからは大きく「逸脱」しているわけであり、戦後の経済学研究と教育を二分してきた二つの制度化されたどちらの範疇にも属さないという、経済学的方法的立場の相違のためであろう。しかしそれだけではなかった、筆者が石川の全体像を捉えようと考え、石川の人となりについて調べてわかったことは、当時であっても大学の同僚から「うとまれた」客観的な理由があったということである。石川自身の性格が大きく作用していたのである。石川の門下にいた出口勇蔵氏はやや控えめにではあるが「石川先生は特別に我執が強い人であった」と述べておられる。氏の言う通り実に「損」な性分であった⁽¹⁵⁾。石川の自我主義は一流で、その上熱血漢ときているから周りの人間はたまらないものがあつた。例えばここに一つのエピソードがあるので紹介する。昭和2年に、哲学的必要性を認識し、一歩からの出発を決意した河上が西田の好意によって、三木清に哲学を学ぶことになった。特に「弁証法」を学ぶために三木を楽友会館に招待した折のことである。その時三木に同行した梯明秀氏が記しているところによれば「河上さんは、実に丁寧な口調で『三木さんのお弟子さん方は三木さんの横の方にお座りください』と言われるので、そのとおりに並んだ。向かい側は河上さんと石川さんが並んで、三木と河上さんとが、とにかく挨拶を交わして間もなく、いつのまにか、石川氏と三木氏との議論に移って、そいつが激論になってしまつて、河上さんと三木さんとの間の話し合いは、ちっとも出来ないままで、それでおわつちやつた、ということがあるんですがね。」とある⁽¹⁶⁾。

このようなエピソードは石川には数多くあり、とにかく石川は相手の都合を一切構わなかつた。おそらくこの場でも、師である河上肇をさしおいて、後は縦板に水の勢いで激論をぶつけたに違いない、そうなれば周りの状況など頭から消し飛んでしまう。石川には相手の話を客観的に聞くという態度が取りにくいところがあり、議論の仕方も一種独特の雰囲気を持っており、身体を前後に揺らしては、しまいには何か自分の説に自分自身で陶醉でもするかのように議論したという。またある時は高田保馬と激論となり、双方腕まくりをしてみかかっていくというようなこともあつた。これが石川興二という人と思想を同時代の研究者たちからも遠ざけた大きな要因をなしている。いわゆる文学部を中心とした京都学派と呼ばれた、西田に師事した一群の哲学者たちがいたが、それらの人たちからも事実上煙たがられ、河上の弟子たちからも敬遠されがちであつた。その原因とするところは石川の経済思想に対する批判意識というよりも、石川自身の性格的な側面が大きかつた。

石川の門下生には白杉庄一郎、出口勇蔵、和田三郎、竹中靖一、相沢秀一、中瀬博、沢崎堅造、桑原晋、筒井清彦、松尾博、金森恒利氏らがいた。経済学史、及び経済哲学の専攻ということもあつて、マルクス経済学者も多く、多彩な顔ぶれを見れば、石川が弟子に自分の思想を押し売りするようなところは微塵もないことが容易に伺われる、その点師である河上や西田とよく似ている。その中の一人京都大学で石川の後を継いで経済学史及び経済哲学の講義を継いだ出口氏が石川について最も多くの発言を残しているが、その中で石川の逝去を悼んで書いた追悼文に石川という人を理解する大きな助けとなるので紹介したい。

「先生は西田哲学的に考えることを主張されたけれども、先生自身の思索はそれとは異なつていた。私はこのことを無遠慮にいうものだから、先生の不興を買うことが多かつたけれども、事實は事実として認識せねばなるまい。そして先生は西田哲学に対しては直ぐに護教的な態度に出られるので、客観的な話し合いをもつことは困難であつた。先生には、西田哲学を語ると、自分が西田さんになつたように思われるのではあるまいかとさえ、思われた。そして他人の見解を客観的に理解しようとする態度がすくなかつたことは残念なことだつた。それが先生自身の思想を正しく理解させない結果にもなつたと、私は思つている。」⁽¹⁷⁾

西田哲学に対して護教的な態度を取るのには石川だけではなかつたろうし、西田哲学に対し特別な思い入れをしていたことから理解はできる。ただ客観的な話し合いをもつことが困難であつたこと、西田哲学を語ると、自分が西田自身にでもなつたかのような印象を周りに与えるというのは、やはりどこか石川の性格的欠陥を指摘せねばならないだろう。石川が虚心に対話をしたのは青年時代からの畏敬の対象であり、とにかく懐の大きかつた西田幾多郎ただ一人であつた。だが、石川の名譽のために述べておくと、書かれた論文は終始実に論理的、客観的で精細なものであつた。

石川には相手の都合などおかまいなしに、押しかける癖がある。晩年のマーシャルに対してもそうであった、80歳をむかえていたマーシャルは三部作の最後に取り組んでおり誰とも会おうとはしなかったが、マーシャルが面会を断っても何度となくケンブリッジを訪ねるのでやむなく時間を割いたというのが石川とマーシャルの出会いであった。このように石川の「自我主義」は時として幸いした、石川は日本人としては最も晩年にマーシャルに師事することが出来たのだから。石川の「自我主義」は西田に対しても同じで、決められた面会時間などはまったく無視して、疑問に思うところがあると私邸まで何度となく押しかけた。西田も親近者には「石川にも困ったものだ」と漏らしていた。

石川が『第三の経済学』の中で「研究生活における体験」として師である西田とマーシャルについて述べているので参考願いたい。最初にマーシャルとの出会いについて石川は「こうして紹介状すらない私が毎週お茶に招かれることとなった。」と一方的に謝辞を述べている。また西田についても「私は先生から解らなかつたら何時でも来いといわれたので、度々先生をお訪ねし時には夜の更けるのも忘れてお尋ねした」と回顧しているが、無論実際その通りであると筆者は思う。ただ尋ねられる方からすると、当惑したことは容易に想像出来ることで、面会を電話で断られても、翌日も翌日も何度でも続けて懇請したという。それだけ学問にかけた情熱が大きかったと共に、石川の自我主義のなせるわざである。

それでも西田が人間石川をどれだけ思いやっていたのかは西田の『書簡集』が物語っている。石川が教職からパージされた時に、西田は石川に同情し、天野貞祐にとりなすよう計らっているし、石川にも次のように送っている。

「私は十七日のフジにて鎌倉にまいります 学兄の御事御同情の至り堪えませぬ 併しどうも現在の如き時勢此際静に自己の修養と学説の精練に努力せられ度 不幸は却って君を大成する所以のものであるかもしれない」⁽¹⁸⁾

次に河上の側からの証言も参考にしておこう、長谷部文雄氏は次のように述べている。「さきに河上先生の弟子として挙げた人々のうち、一般には不審を抱かれる人名もあらうと思われるので、少し注釈を加えておこう。石川興二氏は右にも述べたように、結婚の媒酌までして貰った弟子であったが、学問的にはマルクス主義に近づいたことは嘗てなかった。先生との関係も、ついたり離れたりで、たとえば大正末ころ先生が『経済学批判会』という研究団体を作ると、石川氏はそれに対立して何か別のグループを作ったと記憶する。私たちは石川三回目の裏切りなどと憤慨したものだが、その石川氏も最後まで師弟の情誼を忘れず、先生晩年の隠遁時代は東京東中野の御宅をよく訪問されたことは、先生から度々承り、当時の社会情勢と考え合わせて石川氏に敬意を感じた次第であった。」と⁽¹⁹⁾。長谷部氏の回想は客観的に書かれているように思う。ここからも、石川と河上との関係は実に複雑極まりないもので、石川は学部在学時から尊敬はしていたが、それは反発する心と常に同居していた。石川のその後の歩みは河上への対抗意識から思想形成したといってもよい。石川自身「真理の前に師弟なし」という信条を持ち常に忌憚ない態度で河上に接したと述べていることから推察出来る⁽²⁰⁾。

一時は河上と廊下で会ってもお互いに挨拶も交わさず無視しあっていたというから、その程が知られよう、また河上は石川に「とにかく樋を下げろ、樋が高いから水が流れない」のだと言ったというが、孔子のような人ですら「六十にして耳順ふ」であるから、壮年時代の両者にはお互い譲るところはなかったのだろう。

長谷部氏の回想から石川がマルクス主義に対しては批判的な姿勢を持っていたこと、河上との対抗意識を強く持っていたこと、最後にそれにも拘らず河上に対しては32年の長きにわたって師弟の情誼を忘れず、晩年の河上を気づかったことなど、石川の人となりを知ることができ興味深い。

これまで直接学問と関係のない石川興二の人となりについて語ったのは、石川の自我主義ゆえに他の教官から冷遇され、それが経済思想まで敬遠され、受け入れられない理由となったのであるからやはり記すべきであると考えた。

留学、そして経済学史・経済学・哲学講義

西田哲学を経済学の指針にするといつて、西田の哲学思想からすぐさまに経済思想が生まれる道理もないし、経済学上の諸問題とどう結ぶのかという答えが易々と出るわけもない。そこで西田哲学と経済思想を媒介するような方法、もしくは思想がないものかとの摸索がはじまる。石川独自の講義内容が定まり形をなしたのは留学による体験が大きい。

当時は教授となる条件として洋行経験の有無が大きな意味を持っていたので、文部省としては帰国したら彦根高商教授に迎えるという考えの上で、大正11年3月(1922)2年の期限で渡欧することになった。

田辺元ら共に賀茂丸で日本を発ち、最初の留学国はドイツであったが、航海の途中急遽イギリスにむかった。シェルブールに上陸し、ケンブリッジのマーシャルを尋ねることにしたのである。その理由はマーシャルの警咳に接したいという一心で、高齢のマーシャルに会う機会が万一なくなるようなことがあってはとの思いであった。それからドイツで学び、ギリシャなど南欧を旅し、アメリカまで足を伸ばし満三年にして帰朝した。

当時を回顧して石川は「晩年のマーシャル先生を訪れし頃の思ひ出」という一文を残しているが、石川の文章の中でも大変美しいものであると思う。西田もこれを読んでおり、石川に「ああした優れた学者に会ったことだけでも君の留学の価値があった」と言ったという⁽²¹⁾。

この留学体験が思想形成上大きな役割を果たすことになるのだが、イギリスでマーシャルやピグーら、ケンブリッジの碩学と親しく交わることが可能であったこと、しかし石川にとって、それ以上に意味があったのはディルタイの「生の哲学」との出会いである。

石川が日本を立ったのは1922年3月であった、その年の5月三木清は岩波からの援助でドイツに向かっていた。当時のドイツは第一次大戦に敗れた頃で騒然としていた。その頃のドイツには日本人留学生も多く、天野貞祐、九鬼周蔵、阿部次郎、羽仁五郎、大内兵衛、久留間駿造、石原謙らが学んでいた。彼らとの交友も大いに楽しんだようである。当時のドイツを三木は「ラテナウ暗殺事件以来マルクは急速に下落を始め、数日後には既に英貨一ポンドが千マルク以上になった。やがてそれが一万マルク、百万マルク、千万マルクとなり、遂には一兆マルクになるといふやうな有様で、日本から来た貧乏書生の私なども、五ポンドも銀行で換へるとポケットに入り切れないほどの紙幣をくれるのでマップ(匏)を持ってゆかなければならないというやうな状態であった。」⁽²²⁾と伝えているが、石川も書店で本を求める時には棚一つ分を買ったというから、想像を絶するインフレーションであったことがわかる。そんな状態であったから、2年分の費用で3年賄うことが出来たのかもしれない。

石川は田辺元らと共にフッサールやハイデッカーの講義を聞く機会にも恵まれ、フッサールやハイデッカーの哲学を自分のものにしたいと苦悶した。だが問題は石川の場合専門が経済学であり、究極の目的は西田哲学で経済学を基礎づけることに置かれていた、ところが西田哲学の概念から直接的に経済生活の実際について分析の方法が提供されているわけではなかったため、つまりはその狭間を埋めるような、何かを探し求めていた、しかし容易なことではなかったのである。

ところがディルタイの「生の哲学」と出会って初めて自分の経済思想の立脚点を獲得することが可能であるとの確信を得た。ディルタイの精神科学の方法こそが青年石川に経済学史の方法を提供したのである。留学で身につけた「生の哲学」をもとに独自の経済学史の骨格が形成され、昭和5年に刊行された『精神科学的経済学の基本問題』として集大成された。この著作の大半はアリストテレスの研究であるが、石川はディルタイについて直接的に言及することはないが、しかし哲学的基礎それ自体はディルタイの精神科学の方法によって貫かれていた。

「独逸のフライブルグでは田辺先生と同じパンジョンにいてフッサール教授ハイデッカー講師の講義を聴き、ベルリン大学ではシュブランガー教授の講義を聴いた。こうするうちに、日本ではじめていたカント並びに新カント派の『学の哲学』からディルタイ等の『生の哲学』に転ずることになった。こうして私は満三年後大正一四年の春の帰朝したが、丁度その年に西田先生がアリストテレスの『メタフィジカ』を講読されたのでそれに、翌年は『デ・アニマ』の講読に積極的に出席した。これに基礎を得て、アリストテレスの『倫理学』『政治学』を先生の指導を受けながら研究して、経済学をその成立の根本において明らかにすることが出来た。」⁽²³⁾

つまり石川の言葉のようにディルタイの方法を留学中に身につけ、帰朝後は西田の指導の下にアリストテレスのテキストを詳細に読み、「経済学祖アリストテレス」の経済思想と古典派の「経済学父スミス」を中心として昭和5年に著される処女作『精神科学的経済学の基礎問題』が書かれたのである。

しかしこの段階では哲学的基礎はディルタイの圏内にとどまり、本来彼の目指した西田哲学を基礎とする経済学とは距離があったことも事実である。

帰国した石川は大正14年に彦根高商の教授になるが、彦根ではディルタイを中心として社会学を講じた。また週に一度は京大で外書講読を担当した。これが縁で再び京大に招かれることになり、大正15年京都大学の助教授

に迎えられ、以後石川は河上の後をうけて経済学史と経済哲学の講座を担当した。

次に講義内容であるが、経済学史は経済学祖たるアリストテレスにはじまり、次に経済学父スミスを講じ、時間があるとミルまで言及するというもので、いかにも石川独自のものであった。また経済学史は経済学史として独立し、経済哲学は経済哲学の講義として独立していなければならなかったはずなのに、石川は自分が興奮してくるためか、両者の区別なく、経済学史で言い残したところは、同じ週の経済哲学の講義でその続きを話すという具合で、学生を当惑させたこともしばしばであった。

石川の講義について知る資料は著しく乏しい、そんな中で、杉原四郎氏が石川の講義について次のように記しておられるので、紹介したい。

「私は在学中に先生の講義を二つ（日本経済理論と社会政策）を聴いた。先生の講義の中には、経済学者よりもむしろアリストテレス、ヘーゲル、ディルタイ、西田幾多郎といった哲学者がしばしば登場した、経済学者ではスミス、マルクス、そして河上肇がよく出る人物で、スミスやマルクスの名は他の先生でも出てきたが、河上肇のことが教室できかれたのは石川先生の講義だけだった。」⁽²⁴⁾

そのほかにも石川の講義に関しては記憶しておくべきことがある、その当時文学部では特殊講義というものがあったが、法経済にはなかった。ところが石川は文学部のように特殊講義を講じたくなり、日中戦争の火蓋が切られた翌年の昭和13年に「マルクス経済学」という表題を正々堂々と掲げ特殊講義をはじめた。「マルクス経済学」などという看板を掲げる所はやはり石川流である。おそらくは学問としてマルクスを研究するのであるから何を憚ることもないというのが石川の信条だったのだろうが、時代がそれを許すわけもなく、軍部が寮生などを使って講義ノートを検閲し、それが理由で文部省から突如中止の命令が来る。それで6回ほど続いた特殊講義は5月の中旬頃には経済学特殊講義ということに改めた。

このような機敏な大学側の反応の裏には、この事件が河上事件の後であったこと、また大学側も滝川事件(1933)の二の舞に発展しては困るとの配慮が働いたためであろう、河上肇が大学を去ってからというもの、大学内は反動的な気風が強くなり、石川もやむなくその意向に従った。石川がマルクスを公然と掲げるのも、実践活動とは直接的には関係はないのであって、学問として講ずるのであるなら問題なからうとの判断なのであろうが、何ら憚ることなく信ずるところを行なう直情径行の態度は師である河上に酷似している。しかしこれ以後、時代的にも公然とマルクス経済学という名称を持ち出すことは不可能な冬の時代へと移り変わっていったのである。

不遇の人

既に述べたことではあるが、石川の中には儒教的な考え方がその基礎にあり、国家というものに対しては否定的な見解はなかった。それは天皇制についても同様で、天皇についてはいかにも当時の明治人らしく恭敬の念を持っていた。例えば高松宮が自分のことを天皇に対する臣であると表現したことに対し、同じ兄弟であっても、実の兄に対してさえ「臣」と表現するのだ、やはり天皇という地位となると違うものだといたく感動をしていたという。

日中戦争を前後する頃から、戦火も次第に激しさを増し、軍靴の響きが強くなるに従って、石川の思想も急に熱を帯びてくるようになる、生来気性が激しく、熱しやすい性格の上に、儒教的な考え、天皇制、それに「共同体」的思想は、大東亜共栄圏の思想と通底する質を有していた。無論世界の情勢を客観的に、一々の事実を明らかにすれば、これが本来の社会科学の役割なのであるが……。時代とともに熱を帯びることとてないのだろうが、しかしそれは石川だけではなかった。当時の西田の弟子たち、高山岩男、高坂正顕、西谷啓二らも戦争に深くコミットしていき、『世界史的立場と日本』に終結していく、石川もその時流に乗り、昭和14年には『新体制の指導原理』を発表する。

ただそれでも理不尽な軍部や治安維持法などの悪法には常に批判的な姿勢で対峙したようである、『新体制の指導原理』刊行後は右翼からもつけ狙われたこともあった。

「昭和一五年日本の新体制問題の起こった時、私は『新体制の指導原理』を書いて、日本の行くべき道は『天皇中心の国民共同体』を具現することにあるとし、資本主義経済もこのためには変革すべきことを主張し、従って『治安維持法』は国体の原理である天皇を利用して資本主義体制を保持せんとする社会悪であるといった。」⁽²⁵⁾

社会的に言論活動が困難な時代を迎えていたにもかかわらず、誰に対して憚ることなく自己の意見は自己の意見として述べる勇氣を持っていたのも事実である。

昭和17年のことである、齒に衣を着せないそのスタイルは誰に対しても変わらず、相手が誰であろうと遠慮はしなかったようで、松江高校で講演を依頼され、その講演時にある教官と一緒に、その教官と控え室で衝突し、激しい口論に発展した。こともあろうかその教官は枢密院の顧問と直接に関係があったらしいのだが、その教官に石川は強い口調で「天皇中心の国民共同体」を具現するためには資本主義は変革する必要があること、当時の「治安維持法」を批判したことから、「石川は天皇共産主義だ」、「表面的には天皇を立てるが、実際は共産主義に他ならない」と誹謗された。

また『新体制の指導原理』には治安維持法への批判が含まれていたが、治安維持法を作るのに力を注いだのが時の原枢密院議長であったことから、「京都には危険思想の持ち主がいる」と枢密院会議で問題となり、それが運悪く天皇が臨席した場で取り上げられ、天皇が橋田文相に「石川というのはどうなった」と言われ、それで文相としても何らかの対応を迫られ、即刻文部省から大学側に石川を処分するよう要請があった。

当時の羽田総長が苦心惨憺考えた末に、石川を直接学生との接触のない人文科学研究所の研究員にすることで決着させたい。当時所長をしていたのは高坂正顕であったが、高坂は石川が人文科学研究所にくることを快くは思わなかったようではあるが、石川が高坂の方針に従うということで落ち着いた。昭和18年から2年間講義を一切持たず、研究所員として研究生活を送る。大学の講義を持たずに自由な研究時間を与えられた石川は、西田から鈴木大拙を紹介され大乘仏教の研究に取り組んでいる⁽²⁶⁾。

「不遇」はそれだけではすまなかった、日本が敗戦を迎え、石川もいよいよ学部に戻って研究成果が学生に講義できることを心待ちにし、目を輝かせながら「今までの鬱憤をはらすのだ」といっていた矢先。戦前の言動に対しマッカーサーからは文部省を通さず直々の追放命令「勅令263号」が出た、昭和21年5月のことである。これが日本の学者として公職を追放された第一号であった。追放の直接的な理由は経済学部の拡張案で、東亜経済と日本経済を大学の講座体系に入れたということ、そしてもう一点は人文科学研究所の設置案で、人文科学研究所は東亜新建設に資する総合研究所であるという判断の下に石川が大東亜戦争を理論的に基礎づけた張本人だとの嫌疑をかけられたことによる。

ただ中瀬氏によれば石川追放には学内問題も関連していたのだとして、次のような証言もある。「何れもに就いて、京大経済学部は学問思想系統によって学閥なるものが存在し、自己が不利を受けたと考へる私怨を学内から断片的な論文の一節を証拠としてその筋に提供すると云う、極めて非学問的な行為が存在した結果であると、私は現在も尚その感覚でこれを批判的に見ている。——中 略——私は京大を去る決意もこの学部内の誠に倫理感なき教官に対して、軽蔑の念を抱くことからであった。今も尚教授と云う肩書きだけに対して畏敬の念を持ち得ない。人間の価値は人間そのものにある。」⁽²⁷⁾

石川は学者は家を持つべきでないと考えていたようで、生涯借家住まいをし、清貧を身上としていた。ただ四人の子供たちには教育費として、十分な経済的な裏付けを蓄えていたというのが、大学を追われた上に戦後のインフレである、それまでに蓄えたものはまたたくまになくなり、土地すらないというようなことで、困惑することになった。

しかし幸い石川に同情した鳥養総長が友人の九州電力の副社長から研究費用と生活費を支給するように配慮し、戦後も一冊の本も手放すことなく研究生活は営むことができた。石川の経済学部長時代に工学部に対し比較的理解を示したことから鳥養総長は石川には好感を持っており、大学発展のために尽力した結果なのに、と同情したようだ。

大学を追われ、失意の中で過ごした日々は、石川にとっては不本意な時代に相違はなからうが、しかし大学の教官としての仕事から解放され研究に没頭することの出来た時期でもある。論文も昭和17年を最後に発表されることはなかった。しかしその後15年間の「空白の時」は無意味であったわけではない。昭和32年に「創造的世界経済学序説—その課題と論理について—」が発表されるまではディルタイからも「解放」され、西田哲学の研究に只管沈潜し、西田哲学を直接的な基礎とする経済学を構築するためのよき準備期間となれば、あながち無意味な時ということとはできない。ある人は石川を称して「この男は、世の中が右翼になると左翼といわれ、左翼となると右翼といわれるほどに、中庸なのだ」と言ったというのが、言い得て妙である。

昭和27年3月、6年目にしようやく追放が解除されいよいよ待ちに待った講義の機会が与えられることになった、教壇に再び立つことが可能となったのである、それからは京都学芸大学で五年、停年後は京都女子大学で教鞭を取った。

石川は真顔で「百まで生きる」と豪語していたという、幼少の頃より冷水摩擦で鍛え、病気一つしたことの無い身体であったから余程自信があったのだろう、京都女子大に招かれる時も、70歳で停年をするか、あるいは生涯勤めるかで俸給の額が提示されたそうだが、文字通り「百まで生きる」と考えていた石川は迷わず額が少なくても生涯教壇に立つ道を選択したのだという。ところが76歳で脳血栓で倒れ、それからはほとんど寝たきりの状態の中で93か月、およそ8か年の長きにわたる闘病生活をおくった、昭和51年3月27日逝去する。享年83歳であった。

「第三の経済学」の現代的意義

石川の貢献は学問だけではなく、例えば大学の行政面においてもいくつかの重要な業績が認められる。当時は大学の講座も少なかったが、昭和13年から14年までの間経済学部長を勤めた折、文教予算が押さえられている時期に、「日本経済」と「東亜経済」の二講座の拡充を実現し、中でも京都大学の人文科学研究科設置について尽力した。東西文化の比較研究が重大であると考えた石川は、いつもの調子で教官食堂で熱弁を奮い、文学部を中心とした内藤湖南や狩野直喜らを中心とした東方文化研究所を母体として、法律、経済をも含めた人文科学の総合研究をするという枠組を作った。学内の手続きを整えると次には計画推進のために文部省、大蔵省など関係官庁とは何度も何度も折衝をし、時に激しく衝突したと伝えられる。

人文科学研究科の設置について、久野収氏と河野健二氏の対談は興味深い。

「河野さんたちの京大人文科学研究科にしても、あの西洋部門の新設の出発点は、経済学部の石川興二教授が、軍部の受けがよく、荒木陸軍大将が文部大臣になったとき、荒木を説得して、予算をとった。だからファシズムがなかったら戦後まであるいはできていなかったかもしれない（笑）。そしてとりたてて戦争国策に協力せよともいわれなかったでしょう。」⁽²⁸⁾

また関西河上会の創立に寄与したことも忘れてはならない⁽²⁹⁾。河上は生前法然院を「酷ダ物情ノ静カナルヲ愛ス、其ノ地希クバ屍ヲ埋メン」と詩ったが、河上の希望を実現せんと、石川は墓碑を作るために関係者の賛同を得ようと奔走し、先頭に立って墓石と碑文の選定にあたった。今日の洛東鹿ヶ谷法然院に眠る河上の墓碑は石川の努力なしには考えられない。

筆者も法然院を訪ねたことがあるが、河上の墓地の東側に石川興二の墓碑が立っている。河上を訪れる人は少なからずいようが、石川興二がどのような来歴の人物であるか知る人は少ないであろう。石川は河上の隣りにどこの馬の骨だかわからない墓がたっても心配であると、生前自分で土地を購入しておいたのだという、土地国有論者、共同体論者石川が唯一私有した最初で最後の土地でもある。

その時河上秀夫人が石川に、「死んでまで主人のところに論争をしにおいでになるのですか」と言われたという。おそらく石川はどこまでも論争に行きたかったのだろう。

学問的にも最近では西田哲学の復興はめざましいものがある。河上の経済学を再度見直そうという機運が盛り上がっている、筆者はこれを称して「西田ルネサンス」、「河上ルネサンス」というのだが、西田や河上に関する研究論文の中で、石川興二に言及する研究者はいないのである。西田、河上の側からではないが、福本和夫氏が『革命回想』の第三部で「西田哲学左派の検討」という章で石川について若干の言及している、ただ石川の思想への内在的な批判にはなっていない、他には回想録の中で登場するくらいである⁽³⁰⁾。

もしこのまま忘れられ日本経済学史の中に石川の名を、もはや発見することができないとあれば西田哲学を基礎とした『第三の経済学』も、マルクス経済学にも近代経済学にも還元できない、新しい質を持った第三の経済学研究への可能性を閉ざしてしまうのではないかとの危機感を持ったからである。

晩年石川は「私は西田先生に親しく教を受けた只一人の経済学究として、西田先生の創造的世界の哲学に基づいて今日の経済学の課題を解決するために努力して来た。」⁽³¹⁾と回顧しているが、「只一人の経済学究」とは決して誇張ではない、確かに石川を除いては西田に直接師事した経済学者はいなかった、それも西田哲学の立場から経済学を捉え直すという作業は石川を除いて考えることが出来ない。また戦前はもとより今日までも経済学の立

場から西田哲学を意識した上での経済思想は極めて限られている⁽³²⁾。

石川は学問的な師である河上に反発し、河上がマルクス主義に移行するには批判的であったし、河上の弟子の中でマルクス経済学の立場をとっている側からみれば先程の長谷部氏のように「異端」、もしくは「裏切り」であるとも考えられましょう、しかし河上には初期の著作のように、人道主義的な絶対的非利他主義の立場からの論考や、中期の『資本主義経済学の史的発展』という著作あり、正統的な、いわゆるマルクス経済学には俄に還元できない豊かな質を持っているのである。

無論河上の本来の面目は、生命を賭けた『資本論』研究であり、マルクス主義と考えられよう。筆者はそのこと自体を否定しようとしているわけではない、マルクスにひかれ、共産党入党時に河上が作った歌からもマルクス主義への特別な思入れがあったことがわかる。河上の『自叙伝』はまさに「余はいかにしてマルクシストとなりしか」の告白にあったことは疑いないからである。

辿りつきふりかえりみれば山川を越えては越えて来つるものかな

「越えては越えて」と読んでいるが、これは学生の頃『新約聖書』に心惹かれ、そして無我苑に飛び込み、ラスキンやカーライルなどの人道主義の経済思想へと思想的に遍歴し、遂に真理と出会うことができたという感慨を含んだ詩である。それほどマルクス主義には絶対的な信念を置いていたのだからである。

河上が榊田民蔵に宛た手紙を紹介したが、後にその注として河上は次のように注を付している、「今年卒業の一学生とあるのは、後の京大教授石川興二氏のことである。当時は私が頻りにカーライルやラスキンに心酔してゐた[の]で、石川君はひどく私に共鳴されてゐた。」と⁽³³⁾。この河上書簡には大変象徴的な意味が含まれていると思う、というのは逸速くマルクス主義へと脱皮し、河上の批判者にまでなる榊田民蔵と、もう一人河上からカーライルとラスキンを学び、河上の経済学史を継ぎ、やはり河上への批判者に成長していく石川興二の二人を、真理と正義の前に共に頭を並べて拝跪せんと志せる一味の道人、知己、友人、同志と呼んでいるのである。周知のように晩年の河上は、「科学的真理と宗教的真理」を統一しようと試みた、これを単に河上の不徹底さと考えようが、とにかく晩年に至っても河上にはマルクスだけに還元できない何物かがあったことだけは確かなように筆者には思われるが、如何であろうか。私見によれば石川は河上のそのマルクス主義には還元できない、ちょうどその部分を師から学び継承している。

石川の主著たる『第三の経済学』は石川晩年の長い思索の結晶であり、西田幾多郎という近代日本始まって以来最初にオリジナルな哲学を打ち立てた稀有なる哲学者と、日本『資本論』研究の父たる河上肇の思想圏の中から、文字通り「第三の経済学」という新しい質を持った経済思想が産声をあげたのである。筆者は河上と石川、西田と石川との出会いはどのようなものであったのか、また近代哲学、近代の経済学研究の一つの思想史的事件として関心を持った。そして石川経済学の全体像を描くことはできないものか、また石川経済学の現代的意義を再考し、それによって進べき経済思想の方向性を探ってみたいと思ったのである。

調べていくうちに、とにかく誰かが何らかの形で石川興二について記しておくべきだと考えるようになった。そこで石川の人となりや経済思想の生誕について記すことも無駄ではないと考えるものである。

筆者は次なる論考において、石川の経済思想の意義について、検討していきたいと考えている。

【註】

- (1) 石川興二の代表的な著書としては『精神科学的経済学の基礎問題』昭和5年弘文堂『新体制の指導原理』昭和14年有斐閣、『第三の経済学』昭和38年有斐閣がある。
- (2) 石川興二「西田哲学と経済学」下村編『西田幾多郎一同時代の記録』130頁岩波書店
- (3) アンソニー・ギデンズ『第三の道—効率と公正の新たな同盟』佐波隆光訳 日本経済新聞社1999年、『第三の道とその批判』千川剛史訳 晃洋書房2003年を参照願いたい。また、第三の道の系譜論については、福田敏浩氏の「ドイツ社会主義の第三の道—オットー・ペンハイマー、ハイマン、リッチェル」『彦根論叢』344-345 2003年
- (4) シェイエス『第三の道とは何か』大岩誠訳 岩波文庫
- (5) 経済社会学会が主催する第39回全国大会（2003年度）の共通論題が「『第三の道』の経済社会学—Good

Societyの原理を求めて」であった。『経済社会学年報XXVI』

- (6) 西田幾多郎「講義『日本文化の問題』」『全集』14巻401頁 岩波書店
- (7) 第三の途論についての総括は、さしあたって山之内靖「参加と動員」『システム社会の現代的位相』岩波書店を参照願いたい。
- (8) 佐々木惣一「思い出あれこれ」河上肇『自叙伝』第5巻 岩波新書版 328頁
- (9) 『河上肇全集』24巻56頁岩波書店
- (10) 「学に志す者へ」として杉原四郎編『河上肇評論集』147頁 岩波文庫に収録されている。
- (11) 「石川興二先生の巻」京都大学経済学部『思い出草』156頁
- (12) 「石川興二先生の巻」京都大学経済学部『思い出草』160頁
- (13) 戸田については杉原四郎の『日本のエコノミスト』日本評論社に詳しい。
- (14) 石川興二「創造的世界経済学序説」『経済論叢』第80巻4号292頁
- (15) 出口勇蔵「河上肇の経済学史そのほか」『河上全集』第13巻月報
- (16) 梯明秀「全自然史的過程の思想」創樹社268頁
- (17) 出口勇蔵「師を憶う」『経済論叢』第118巻128頁、聞き手 水田・竹本・田中「京大におけるスミス研究—出口勇蔵先生からの聞き取り」『経済評論』1991年4月
- (18) 『西田幾多郎全集』第19巻247頁 他にも1845番などが参考になる。
- (19) 長谷部文雄「弟子をめぐる」『河上肇の人間像』天野・野口編図書新聞社106頁
- (20) 石川興二『第三の経済学』有斐閣に収められた「序言 研究生生活における体験」が参考になる。
- (21) 「晩年のマーシャル先生を訪れし頃の思ひ出」『社会科学』特集マーシャル研究改造社
- (22) 三木清「読書遍歴」『三木清全集』第1巻岩波書店 413頁
- (23) 石川興二「西田哲学と経済学」『西田幾多郎—同時代の記録—』131~132頁 尚、この間の事情は「ドイツ生活を共にした田辺先生の思い出」『田辺元全集』第2巻月報筑摩書店に詳しい。
- (24) 杉原四郎『読書燈籠』未来社163頁
- (25) 石川興二 前掲書 44頁
- (26) 森嶋通夫は当時を懐古して次のように語る。「石川教授の休講が続いたが、そのあと経済哲学は高田によって受け継がれることになった。学生間の噂によると、石川教授の陸軍批判が特高憲兵隊の逆鱗に触れ、彼はその筋の圧力で休講を命ぜられたとのことだった。」と述べている。石川の後を継いで講じたのは高田保馬である。また、石川の経済哲学を、森嶋は「石川式西田哲学」と呼んでいる。『思想としての近代経済学』75~77頁、岩波新書 1994年
- (27) 中瀬博次『『第三の経済学』の石川興二先生』『河上肇記念会会報』38号13~14頁
- (28) 久野収『ファシズムの中の一九三〇年代』リプロポート256頁、また出口前掲論文を参照願いたい。
- (29) 石川興二「河上肇先生の歌碑について」『河上肇の人間像』図書新聞社
- (30) 福本和夫『革命回想』第三部叢書インターブックス
この第五章の「西田哲学左派の再検討」の中で特に西田哲学左派は西田哲学だけではなく、河上の影響下にあることの指摘は興味深い。
- (31) 下村寅太郎『西田幾多郎—同時代の記録』岩波書店135頁
- (32) 小林直衛「病床五年の石川興二先生をお見舞して」『東京河上会会報』29号、杉原四郎「石川興二先生を悼む」『東京河上会会報』40号、鈴木一典「河上肇と『第三の経済学』に思いをはせて」『河上肇記念会報』37号、中瀬博次『『第三の経済学』の石川興二先生』『河上肇記念会会報』38号などである。
- (33) 大正6年3月8日榊田宛書簡『河上肇全集』岩波書店24巻56~58頁